

# 八釣川 水底絶えず 行く水の

## 続きでそ恋ふる この年頃を

(柿本人麻呂歌集 卷十二・二八六〇)

番歌も人麻呂の作歌である可能性が高いとみられています。

水底を流れる水は肉眼で見えるものではありませんが、そこに水は確かに存在しています。それと同様に、私の心の奥底でもう何年もの間、あなたへの思いがとうとうとあふれ続けている——そんな静謐で情熱的な恋心を感じさせます。

(県立万葉文化館指導 研究員・井上さやか)

|| 原則、隔週掲載

七夕伝説が天の川を舞台に描かれるように、「万葉集」の恋歌でも、しばしば川が登場します。この歌では、川の流れが絶えることがないように絶えず恋しく思っている、と川の流れてに寄せたとえが用いられています。恋の歌の常套表現であり、古くから水の豊かな日本に詠まれた八釣川

本らしいたとえだと思えます。

冒頭の「八釣川」を別の川の名に入れ替えても成り立ってしまう歌ですが、そんななか

で「八釣川」と詠んだのは、この地で交わされた恋歌であったか、作者にとつてゆかり深い地であったためと考えられます。

歌に詠まれた八釣川

### やまと 万葉がたり

は、万葉文化館の近くを流れる小さな川で、桜井市高家から八釣山の裾へ流れ下り、明日香村飛鳥で北に折れ、香真山の西、耳成山の東をめぐって寺川に合流します。万葉ゆかりの地を流れる川といえます。流域にはその名も八釣という集落があり、一説にはこの地に顕宗天皇の宮があった

ともいわれます。

この歌には「柿本人麻呂歌集」から引用したという注記があり、すが、人麻呂自身の作歌かどうかははっきりしません。ただ、人麻呂が天武天皇と藤原氏出身の五百重娘との間に生まれた新田部皇子

に献上した長歌があり、その反歌に「矢釣山 木立も見えず 降りまがふ 雪のさわけ 朝樂も」(巻三・二六二)とあって、「八釣(矢釣)」の地名が詠み込まれた万葉歌がこの二首だけであることから、二八六〇

【訳】八釣川の水底を絶えず流れゆく水のよう、絶えず恋しく思う。この何年間かを。

# 白珠しろたまは

## 人に知らえず 知らずともよし

## 知らずとも われし知れらば 知らずともよし

元興寺僧 巻六・一〇一八

古代の瓦を残す奈良市の元興寺。元興寺は、飛鳥寺が平城京に移転してできた寺院であり、今年はその移転から1300年にあたり、1300年にあたり、今回は、その元興寺の僧侶が自らの身の上を嘆いて詠んだという歌をご紹介します。

なりませぬ。白珠(真珠)という価値あるものを自身にたとえ、その価値が人に知られていなくても、自分自身を知っているにいいのだと歌います。旋頭歌は、前半と後半で問答のようになる歌も多いのですが、この歌の構成は、まるで自問自答しているかのようです。

歌とは異なる「旋頭歌」と呼ばれる歌体で、五七五七七の6句から一人で修行をして悟り

# やまと 万葉がたり

を開いた僧侶であったが、世に認められず人々から軽んじられていた、とあります。専門的な業界は狭い世界です。ある程度の能力があっても人脈がなくて初めて認められるケースは少なくありません。一人で修行をして悟りを開いたということであれば、彼は能力を認められるだけの

人脈を築けていなかったのかも知れません。この僧侶と対照的な事例があります。道慈という奈良時代の僧侶がいます。道慈は、長屋王の宴に招かれた際、詩才のないことや仏の教えと世俗の情の

【訳】白珠は人に知られない。しかし、知られずともよい。たとえ人が知らなくても、自分自身が知っているのなら、人が知らなくてもよい。

元興寺の僧侶が詠んだ歌も、世俗との距離をとるような表現がなされますが、表面的です。本当は認められたという奥底の思いがにじみ出ているように、彼が本当に悟りを開いていたのか疑いたくありません。彼の「白珠」は、果たして人に知られる日が来たのでしょうか。

(県立万葉文化館研究員・吉原啓)

|| 原則、隔週掲載